**「伊豆サマーリトリートで語られた物語」**

**2023年9月8日～10日**

**伊豆サマーリトリート**

**スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダ**

**於・慈眼院宿坊 禅の湯**

**『歯と舌』**

ある僧院に、誠実で勤勉である反面、短気で他の在院者たちによくけんかを吹っかける隠者がいた。ある時、彼は非常に憤激したので、全身は震え、口からは血がにじみ出始めた。彼は不安になってきたので、この問題の解決策を求めて師のもとに行った。師は、「さあ、この怒りが自分を殺していることを理解して、自分を正す方法を真剣に探しなさい」と言った。このことを説明するために、師は「おまえには歯は何本あるかね？」と尋ねた。弟子は「30本です。小さい頃に2本取れました」と答えた。

「舌は何枚ある？」と師が尋ねると、「一枚です」という即答が返ってきた。すると師は言った。「私たちは皆、同様の本数の歯と1枚の舌を持っている。しかし、食べ物を噛んでいるときに、 不注意から歯で舌を噛んでしまい、血が出ることは知っているね。舌と歯の間には明らかに争いがあり、ほとんどの場合、歯が勝つ」「しかし、歯はゆっ くりと虫歯になる。老人は若い人よりも歯が抜けていることもある。それに対して舌はずっとある。この世での最後の日まで私たちは一枚の舌で生きるが、すべての歯が無傷とは限らない。同様に、暴力的な人はすぐに消耗しエネルギーもすぐに枯渇する。しかし穏やかなものは、その強さと活力をより長く保つのだよ」

**『吉報か凶報か』**

中国のある農夫が駿馬を飼っていた。ある日、その馬が別の馬を連れて来た。これを見た隣人の一人が「吉報だね」と言った。農夫は「吉報か凶報かは誰にも分からない」と言った。

農夫は二頭目の馬を息子に与えた。息子はその馬に乗るようになってしばらく経ったときに落馬をして足を骨折してしまった。隣人は「凶報だね」と言った。農夫は「凶報か吉報か誰にも分からない」と答えた。

数日後、その土地の王の兵士が王の軍隊の新兵を徴兵するためにやって来た。兵士が農夫の家に行くと、怪我人の息子しかいなかった。息子は怪我をしたことで、徴兵から逃れられたのだ。もちろん吉報である！

**『7通りの妻』**

ゴータマ・ブッダがこの世にご存命だったころ、アナタピンダという男が住んでいた。彼の妻はスジャータと言った。スジャータはけんか好きで、よく他の家族とけんかをした。あるとき、お釈迦様がその地域を通りかかったとき、アナタピンダの家に泊まることになった。お釈迦様は数日間の滞在中にスジャータのけんか好きな性質を知られた。お釈迦様はスジャータを呼んでこうおっしゃった。「スジャータ、妻には七つのタイプがあることを知っていますか？」

「最初のタイプは殺人者のようです。彼女は不純な心の持ち主で、夫を尊重せず、結果として別の男性に心を向けます。

2番目のタイプは泥棒のようです。彼女は夫が苦労して稼いだお金を自分の肉体の快適さのために使い、必要であれば、ためらうことなく夫からお金を盗みます。

3番目のタイプは先生のようです。彼女は家庭全体を支配し、夫やその他の家族の出来事の優位に立ちます。

4番目のタイプは友達のようです。彼女はあらゆる面で夫を助け、重大な局面に直面すると必要に応じて役立つアドバイスをします。

5番目のタイプは姉妹のようなで、４番目のタイプと同様に、夫に全身全霊で尽くし、あらゆる事柄において夫を助けます。彼女は愛情深く思いやりがあり、姉のように夫の世話をします。

6 番目のタイプは母親のような妻です。彼女は夫を我が息子のように世話します。

最後に、召使のような妻がいます。彼女も夫に仕えていますが、黙って不平を言わず、何の期待もしません」

それからお釈迦様はスジャータに向かって「あなたはどのタイプの妻ですか？」と尋ねた。そこでスジャータは 自分の間違いに気づき、どうすれば自分を正せるかを真剣に考え始めた。

**『女主人と女中』**

あるところに、優しく、礼儀正しく、控えめな金持ちの女性がいた。彼女は大所帯で数名の召使いがいた。その中に頭がよくて機転が利く女中がいた。彼女は女主人の素晴らしい振る舞いが本物なのか、それとも環境が良いから 優しいのか疑っていたので、調べてみることにした。

ある日、彼女はわざと部屋に閉じこもったまま、時間通りに仕事を始めなかった。女主人がどうしたことかと尋ねると、女中は「たった一日少し遅れたくらいで、イライラなさらないでください」と言って女主人を怒らせた。翌日、女中が同じことを繰り返すと、女主人は部屋にやって来て、棒で女中をたたいた。この事件のニュースは他の召使いにも広まり、女主人の性質が皆に明らかになった。

**『魔法の鉢』**

ある朝、王が朝の散歩に出かけると、 一人の物乞いがあらわれた。

「何が欲しいのですか？」と王は尋ねた。

「よくお考えください」という返事が物乞いから返ってきた。王はそのような返答を予期していなかったので驚いた。

「さあ、何でも欲しいものを言ってください。そうすれば届けます」と王は断言した。

 物乞いはカバンから小さな鉢を取り出して、「この鉢を満杯にしてくださるなら、何でも構いません」と言った。そこで王は家臣たちに、「宝庫からダイヤモンドを持ってきて、その鉢に入れよ」と命じた。

しかし驚いたことに、ダイヤモンドは その鉢に入れた途端に消えてしまった。 皆が自分の目を疑った。王は「もっとダイヤモンドと宝石を持ってきて、その鉢に入れよ」と命じたが、何度やっても同じことが起こった。そのニュースは燃え広がるように王国中に広まった。

そこで王は物乞いに向かって、「すみませんが秘密を教えてください」と言った。

物乞いは、「これは人間の頭蓋骨です。それを鉢に見えるように磨きつづけています。この中に何を入れても消えてしまうのです」と言った。

この物語には隠された意味がある。私たちの欲望は満たされることがない。 一つの欲求が満たされると、また別の欲求があらわれる。私たちは常にもっともっと欲しいのだ。しかし、肉体的 快適さ、権力、威光、名声、評判など、 私たちが得るものはすべてすぐに消えてしまい、私たちの欲望が満たされることはない。私たちの鉢はいつも空っぽなのである。何百万もの人々のうち、外側に何も求めない人が僅かだがいる。彼らはあらゆる欲望を遠ざけ、最終的には内側から満たされる。

**『金の杖』**

ある時、墓の近くに住んでいる人が墓の中から声を聞いたが、怖気づいて墓に近づけなかった。彼はそのことを友人に告げた。その友人はそれほど臆病ではなかったので、その出来事について調べてみることにした。次の夜、彼が墓の近くにいると、真夜中に同じ声を聞いた。彼がその墓を掘ってみると、「私は黄金の宝です。あなたの友人に自分自身を差し出したかったのですが、 彼は怖がって私に近づくことができませんでした。もしお望みでしたら、あなたに差し上げます」という声が聞こえた。「でもどうやって私のところに来てくれるのですか？」と男が尋ねると、「明日、沐浴をして、部屋をきれいにしておいてください。私たちは修道士の衣装を着て行きます。私たちのために別の部屋を用意しておいてください。私たちは部屋に入って金のつえに変身します」と声が言った。

男は言われたとおりに、沐浴をし、部屋を掃除した。約束の時間になると8人の僧侶たちがやって来て、軽食をとり、次の部屋に入るとすぐに金のつえに変身した。

この出来事を聞いた村の別の男は宝が欲しくなり、8人の僧侶を家に招いた。僧侶たちがやって来たが、彼らは乱暴で荒っぽくなったので、警察沙汰になった。さて、墓から声を初めて聞いた 男は、友人の家に行き「俺のおかげで宝が見つかったのだから、その宝をよこせ」と言った。しかし、金を持ち去るために部屋に入ると無数の毒蛇が男を攻撃しようと這ってきた。男はたまらず逃げ出した。

この話の教訓は、結果を得ることを望んでいるにもかかわらず、そのために進んで働こうとしない人がいるということだ。彼らは臆病すぎて最後まで夢を追い続けることができない。彼らは最初のうちには必然的な失敗に怯えている。勇気があり、勤勉で、忍耐力がある人だけが、大切な目標を達成できる。

**『ラーマの思し召し』**

ある村に、機織りがいた。彼は村の市場で品物を売って生計を立てていた。彼はとても敬虔な人だった。お客が彼に布地の値段を尋ねると、機織りはこう言った「ラーマの思し召しによって、糸の値段は１ルピー、工賃は４アナです。私の利益は２アナなので、布の値段はラーマの思し召しによって１ルピー６アナです」。誰もが彼を信じて布地を買った。

ある夜、彼は村の礼拝堂に座って神の御名を唱えていた。そのころ盗賊の一味が村の金持ちの家を襲撃した。彼らは略奪品を運ぶ男が欲しかったので、機織りを捕まえて、荷物を運ぶように強要した。しかし少し行くと警察が来るのが見えたので、盗賊たちは逃げ出した。機織りは荷物を持ったまま警察に捕まり、牢屋に入れられた。翌朝、長官の前に引き出され、昨夜の出来事を説明するよう求められると、「ラーマの思し召しにより私は村の寺院で神の御名を唱えていました。するとラーマの思し召しにより盗賊たちは私を捕まえて、頭に彼らの荷物を載せました。しばらくしてラーマの思し召しにより 警察が来て、盗賊たちは逃げ出し、ラーマの思し召しにより私は捕らえられました」。 長官は状況を理解し、彼が信心深いことがわかったので釈放した。

それから機織りは、「ラーマの思し召しにより、私は再び自由になりました」と言った。